

《「歴史と文化と緑の環」/山形らしさの復権」ケーススタディ1-3 設計メモ
霞城セントラル広場の計画について

三谷 康彦

(株)日建設計 東京本社 ランドスケープ設計室 設計主管

みたに・やすひこ—米国でランドスケープアーキテクトの実務経験16年。そのうち7年は、サンフランシスコのPeter Walker事務所勤務にて、極東プロジェクトのプロジェクトマネージャー。1997年、(株)日建設計東京本社入社、現在に至る。



●霞城セントラルと多目的広場

駅西口再開発エリアのシンボルタワーとしての霞城セントラルは、ほぼ市内の全域から一望することができ、山形市内で自分のいるロケーションを確認する上で、またとないモニュメントとなっている。そのビルの足元の一翼に位置するこの広場は、“多目的”広場という名称が冠されているように、多目的なアクティビティに対応できる外部空間が用意されている。また、この水平方向に広がる外部空間は、建物の中の垂直方向に広がる大アトリウム空間と呼応して、建物内外の連続性と空間の広がりや施設全体の多目的・多機能性を演出しているのも特色と言える。

広場の中に用意された45度振った形の軸線は、建物のダイナミックな特色のあるアトリウムのガラスファサードの形態を受けて、動きとオーダーを広場に与えると同時に市民の駅への、また駅からのショートカットとなるように意図されている。この軸線の45度の振りは、広場全体の舗装パターン・植栽パターン・水景パターンをデザインする上でのモチーフともなっている。

●多様なアクティビティを誘発する空間

広場の中央部にはオープンスペースを設

け、多様なイベントなどに対応できる空間とするために、観客用のベンチとしても使える大階段広場やイベント用の照明・アンプ音響用のサブ電源なども併せて用意している。

広場床の舗装の下にノズルが仕込まれたドライ・ファウンテン（下に水の溜まる池のない噴水）の水景の三角形のエリアもいったん水が出るのを止めれば、この部分も広場として利用できるように計画している。普段はこの広場の噴水は、ビルの角の建築的な表情豊かなロンドナが、まるで水中に浮いているように見える三角形の水盤と呼応し一体となって、広場と建物の結び付きをより強固なものとしている。水盤から広場側に布状に伝い落ちる水は、広場のドライ・ファウンテンの舗装部分表面を流れて下流で集められ、再びビルの地下の機械室に戻され、池補給水として再利用される。

●コラボレーション

この辺りの多目的広場の敷地境界を超えた、官民学一体となったコラボレーションが、今回のプロジェクトの成因の1つとして高く評価されてもよいだろう。広場における学際側からの支援としては、東北芸術工科大学学長の會田雄亮先生のモニュメント

の制作を忘れてはならない。

西口の駅前から東西方向に走る都市軸としてのメインストリートに対して、多目的広場の西側を走る霞城公園に至る道は、どちらかという和生活道路・レジデンシャルな香りが強く、広場の霞城公園線側は植栽・しつらえ共に高層でマッシブなビルのスケールをブレイクダウンしたものとする必要があった。

ここに會田先生の作製された、軸線から45度振った形の基壇を足元に置き、美しい色のタイルのレイヤーでできた垂直に起立するモニュメントと、自由なエレガンスを感じさせるアーチ状のベンチを配した。加えて自然風の株立ちヤマボウシのランダムな植栽で、西側に必要なオープンな感じを残しながらうまくスケールをブレイクダウンして閉じることができたと思う。

●広場の休息空間…メタセコイアの林

ビル低層棟の小端部分ファサードのポリュームを受ける形で、メタセコイアをグリッドで三角形にマスで植えて林を創出し、その中に山形県特産の材木、そして市内のメーカーによるシンプルでいて、座り心地の良いベンチをお行儀良く据え付けている。林の中の床部分には、静かな落ち着いたム

ードを求める市民に遠慮なく入っていただくために、踏圧によって擦り切れるのを防止するための装置で補強した植栽基盤の上に、高麗芝の品種改良品を植栽している。

●ペーパメント

多目的性の保証のために、広場の中での主立った植栽エリアはメタセコイアの林部分だけで、他はすべて舗装で覆われる。ここでもし舗装そのものにテクスチャーや色の変化がなければ、歩道や車道部分のアスファルト舗装のように、下手をすれば茫漠とした、だっ広いだけの空間になってしまう。こうした都市的な空間にあって、その中でヒューマンなスケールや暖かみを訪れる人を感じていただけるように、歩道部分のペーパメントには自然な暖かみのある色のタイルを使用して、それを適度な幅のストライプ幅に割り込んで舗装パターンとした。

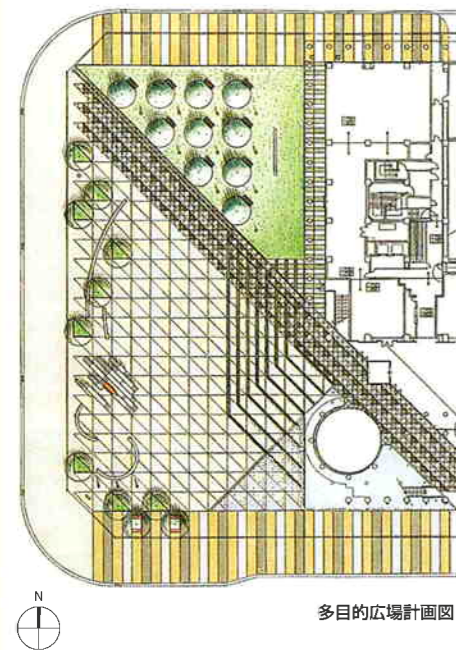
広場内のペーパメントも、45度振った軸線を受けて二等辺三角形のパターンを基本モジュールとしながら、広場内に色の違い、テクスチャーの微妙な違い、素材の違いを生かしながら、ヒューマンな空間スケールをつくっている。

●山形らしさ…地場産業

山形の地場産業である鋳物グレーチングを照明カバーに流用した照明灯兼ポスター掲示ポールを用意した。ポスター掲示スペースにはビルの中の映画館の最新映画や、各種イベントの案内をしていただき、市民への情報の発信源とした。



霞城セントラル4階の屋上庭園から広場を見る



多目的広場計画図



モニュメント「虹の防人」とアーチ状のベンチ



公園西側の株立ちヤマボウシのランダム植栽とペーピングパターン



アーチ状のベンチ



ドライ・ファウンテン



大階段広場（観客用のベンチにも活用できる）



照明灯（ポスター掲示ポールも兼用）